

私の「駆け出し」の頃

関西学院大学名誉教授

賀集 寛 (かしゅう かん)

私は1952年に関西学院大学卒業後、大学院に進むと同時に日本心理学会と関西心理学会に入会し、研究発表をするようになった。専門領域は言語学習（記憶）である。発表にあたってはその都度、私の恩師・石原岩太郎先生のご指導の下、入念な準備をして臨むのだが、お歴々の前でしゃべるのは緊張と不安でいっぱいだった。しかし、会場の先生方は最後まで席をお立ちになることなく、私の未熟な報告を忍耐強くお聞きくださった。このような経験を重ねるうちに、妙に自信と勇気が湧いてきて、初めに抱いていた不安は解消していった。

学会に参加するにつれて、多くの方々と交流をもつようになったが、京都大学の梅本堯夫先生には研究領域が同じということもあって、お目にかかることが多かった。そして、私の研究に対して適切なコメントをよくいただいたが、あるとき、私にとって一生忘れることのできない事柄に出くわしたのである。当時私は言語材料の心理的特性について研究していたが、参照したい論文がいくつかあったなかに、*Journal of Psychology* (1949) に載っているハーゲン (Haagen) の論文があった。ところがこの文献はわが大学にはなかったのである。このことをある学会で梅本先生にお会いしたときに、お話ししたのである。

それから2～3週間経ったある日、梅本先生から一通の封書が届いた。開けてみると、さきにお話したハーゲンの論文の要旨を日本語で何枚もにまとめられたものである。先生にお話したとき、私はこの文献が京大にあるかどうかをおたずねしたわけではなかった。それなのにここまでしてくださるとは。しかも他大学の院生に対してである。この思いやりに満ちた親切なお取り計らいに恐縮しながら、ありがたく読ませていただいた。感謝しても感謝しきれない気持ちでいっぱいだった。同時に、この経験を通して、研究者はその所属の垣根を越えてお互いに助け合うべきだという大事な教訓を、梅本先生から教わったように思っている。

以上、私の駆け出しの頃を振り返り、二つのことを述べた。一つは研究発表の不安と心配を払拭できたこと。二つは梅本先生から賜った学恩である。両者に共通していえることは、学会の先輩方の、所属に関係なく後進を育てようというお気持ちであり、それによって私も育てられたのだということである。このようなあたたかい空気に包まれて学会活動をスタートすることができた私は、本当に幸せだったと述懐している。



Profile — 賀集 寛

1952年、関西学院大学卒業。関西学院大学大学院博士課程（文学博士）を修了後、頌栄短期大学、ノートルダム清心女子大学、関西学院大学、川崎医療福祉大学で教授を歴任し、現在は関西学院大学名誉教授、ならびに川崎医療福祉大学客員教授。専門は言語心理学、記憶。主な著書は、『連想の機構（心理学モノグラフ No.1）』（単著、日本心理学会発行／東京大学出版会発売）、『日本語の表記形態に関する心理学的研究（心理学モノグラフ No.25）』（共著、日本心理学会モノグラフ委員会）、『言語と記憶』（共編著、培風館）など。